

はばたき

大分大学教育福祉科学部

附属小学校便り No. 8

平成28年1月14日

2学期の振り返りと3学期の決意 PART2

指導教諭 山田眞由美

前号で予告しておりました、始業式で発表してくれた2年生、4年生、6年生の内容をご紹介します。

<2年2組 大友華蓮さん>

私は2期にプランコで立ちこぎをしていました。ある日友だちから

「ダメだよ。」

と注意されました。私は、「いけないことをしたなあ。」と思って、あやまりました。すると友だちは

「今度から気をつけてね。」

と言ってくれました。私は、友だちにお礼を言って、次からつかうときに気をつけることができました。それは、私のために注意してくれた友だちのおかげです。

3学期は私の友だちが私のためにしてくれたように、私も誰かがいけないことをしていたら勇気を出して言いたいと思います。

<4年1組 馬場海生さん>

ぼくは、2学期、友だちとのトラブルを注意・反省・感謝でのりこえることができました。ある日の朝、友だちと話していると、友だちをイライラさせてしまったようで、言い合いを始めてしまいました。この時、すぐに終わらせることができませんでした。言い合いはやがてケンカになってしまいました。周りで見ていた友だちや学級委員も注意してくれたのです

が、怒っている気持ちがおさまらず、やめることができませんでした。ケンカはその後も続き、ますます激しくなっていました。しばらくして先生が教室に来て、ケンカを止めに入ってくれて何とかケンカをやめることができました。その後、先生に見守ってもらいながら、ケンカした友だちと話し合いをしました。その話し合いの中である考えが浮かんできました。それは、「自分が傷ついているのなら、相手も傷ついているのではないか。相手の話をよく聞き、自分の悪かったところは素直に認めなければならない。」という考えです。

話し合いの中で、自分の意見ばかり言い合っていたぼくたちに、先生は歴史のたとえ話をしました。軍師とその家臣のたとえ話です。「軍師が家臣から信頼されていたのは、家臣の意見を軍師がよく聞いていたからではないか。みんなから信頼を得るには人の話をよく聞かなければならない。」という内容の話です。歴史好きなぼくたちはその話を聞いて、納得しました。話し合いの中で、ぼくたちは自分の意見ばかり言っていました。だから、ケンカをやめることができなかったのです。相手の話をよく聞いて、自分の悪かったところを認めなければ仲直りはできないし、人から信頼してもらうことはできません。だから、ぼくは話し合いの中で、友だちの思いをよく聞きました。そして、自分の悪かったところを反省して、これからどうするかを伝えました。すると、友だちも悪かったところを認めて謝ってくれました。このようにして友だちと仲直りができ、ケンカを解決することができました。

こんなふうに「自分が傷ついているなら、相手も傷ついているのではないか。相手の話をよく聞き、自分の悪かったところは素直に認めなければいけない。」という大事な考えが見つかったので、3学期は争いをやめてみようと思います。また、「対立」と「向き合うこと」の違いもクラスみんなで考えたので、トラブルが起きたときには友だちと対立するのではなく、向き合って解決していきたいと思います。

最後に、大事な考えを見付けることができたのは、注意してくれた周りの友だちや学級委員、たとえ話をしてくれた先生のおかげだと思って感謝

しています。この出来事を生かして、3学期は4年1組を笑顔あふれる学級にしたいです。

<6年2組 溝口 申二さん>

ぼくが、2学期頑張ったことは、赤組の団長をしたことです。その経験から学んだことがあります。それは、本気で取り組むことの大切さです。ぼくは最初のうちは、団長という立場を忘れて団長らしくない行動をとっていました。ある日、先生から

「団長を辞めなさい。」

と、言われ、悔しくて・・・ぼくは、その日の練習を本気で取り組みました。すると、赤組のみんなが本気で応援してくれて、ぼくはとても嬉しくなりました。

そして、いよいよ本番がやってきました。ぼくは、とても緊張していました。ついに運動会が始まり、最初の「色の団結」でぼくは全力で声を出したので、とても疲れました。でも、休んでいる暇はありません。色々な学年の団体競技でも声を出しました。午前の部が終わり、休憩に入りましたが、ぼくは最後の「色の団結」のことで頭がいっぱいでした。いよいよ午後の部の「色の団結」が始まりました。「これが最後だから、力を出し切ろう」と心に誓い、「色の団結」に臨みました。いつも以上に声を出しました。赤組のみんなもとても盛り上がり、大きな声が出ていました。「色の団結」が終わったあと、どっと汗がふき出てきました。疲れたけど、とても嬉しかったし、すがすがしかったです。

結果として、今年の運動会で、ぼくは優勝も応援大賞も手にすることはできなかったけど、ぼくの中では何かをとったような気がしました。赤組のみんなが本気で頑張ってくれたので、結果も大切だけど、それ以上に中身が大事なこと、何事にも本気でやれば、悔いが残らないことを学びました。

このことから、ぼくは3学期も何事も本気で取り組んで頑張っていきたいと思います。

この3人の発表の後に校長の話がありました。その中で真っ先に校長が評価したのは3人の「飾らない本物の話」と、6年生の溝口さんの発表前の態度のことでした。実は、3人が発表に入る前、最初の太友さんがマイクを持って話をする時に、ちらりと溝口さんと馬場さんの顔を見ました。太友さんは「いきなり話すのか、それとも3人で礼をした方がいいのか」を迷っていたようでした。ちょっとした間がありました。端から見ていて3人が目だけで相談しているように見えました。そして、溝口さんが軽く頷いて、3人がそろって礼をし、それから太友さんの発表に入りました。そのことを校長は取り上げ、

「溝口さんは年下の二人が困らないように判断して進めました。自分だけ出来ていれば良いでもない、先生どうすればいいですかでもない、自分から進んで動く、自分から本気でやっていくと運動会で学んだことをあのちょっとした場だけれど、生かしています。あれが成長です。ある出来事が起きたら、同じ出来事は2度と起きないので、その出来事をどう考え、その後はどうつなげていくかが大事です。溝口さんは運動会の出来事を考え、つなげたのですばらしいと思います。」

と、評価しました。

今回2度にわたって、子どもたちの「飾らない本物の成長」を紹介させていただきました。「自己の成長」というテーマで具体的な出来事を取り上げ、自分の成長を客観的に評価し(考え)、実感し、つなげるという学習を本校でも研究しているところです。また、国語科の学習では、国や県も意図や目的を明確にした「書くこと」へと学びの転換を求めており、これまでの作文指導の反省と見直しを進めています。

学校便りで紹介させていただいたのは、各学年代表の児童6人ですが、全校児童一人一人に「それぞれの成長」があります。3学期はそれを子ども自身が評価、実感し、さらなる成長へとつなげられるような取組を考えていきたいと思っています。